

インフラの 町医者

全9回の5
をめぐって
第8回建設トップランナーフォーラムより

第2部「複業により地域建設（北海道）の植村真美を活性化する」では、「お氏」「中部森林開発研究会」の林正英氏、「地域プランドへの挑戦」と題して植村

林社長



お客さま目線でニーズ創出

豊明建設（鹿児島県鹿屋市）は2007年、地元町内会長からの相談を受けて農業に本格参入した。モットーは、無農薬の多品種少量栽培による身の丈に合った「こだわり農業」。農園では、取引先のレストランのシェフらとの交流や一般の農業体験も受け入れる。林正英社長は「（本業

整備したほか、立山には県内で需要が高いセンリョウや明日葉などを植え付けた。

「多様な連携で手を加えていけば、里山は必ず人に恵みを返してくれる」。顧客密着の農業と里山再生とのマッチングで、限界集落の延命につながるのが大き

植村取締役



ゼロからのブランド戦略

北海道の中央部に位置する赤平市。拠点都市の札幌市と旭川市に挟まれ、人口の流出に苦慮する。同市に本社を置く植村建設は、取り立てて特色のない地元「元気を取り戻そう」と活動を開始した。2005年に「赤平よりみちの駅」を設

モットーは「ゼロから始める」。地域の食材を知り尽くす主婦のアイデアから「じゃがール」などの商品が誕生した。オリジナルのホットドックを売る「そらふわ号」は地元のイベント

れを濁水処理や法面保護に利用する「ウッドチップリサイクルシステム」について発表した。

濁水が河川を汚染し、沿岸漁業に悪影響を与えるといった問題もあった。そのような中、廃材をチップ化し法面敷布、河川フィルターとして利用すると、表土の流出や濁水の発生を抑えることができたという。

同研究会が発足した約30年前は、木材価格の下落で工事現場で伐採された樹木は野焼きや地中に埋めていたが、煙や火災、腐敗による地盤沈下のほか、高度経済成長期による建設現場の

廃材チップ化の効用拡大

置したのに続き、オリジナルフードの販売車「そらふわ号」をデビューさせた。同社の植村真美取締役は「雇用とコミュニティビジネスの創出が目的だった」と振り返る。同社ではイメージを形にするサイトを早め、次々と地域ブランドの漬物や麺、総菜、お菓子の工房を広げた。

中部森林開発研究会（愛知県豊田市）の丹羽廉介氏は、造成工事などで伐採された木材をチップ化し、それが集まり、現在では、濁水処理、土砂流出防止、バイオマス発電に利用され、災害時などの廃材処理に活躍が期待されている。

丹羽氏



（「地方建設記者の会」取材班）